

## 4 資料や講師の体験談を活用し主体的追究がされるように配慮した授業展開例

教科(科目)	日本史 B	単元名	第二次世界大戦
本時の主題	戦争と国民生活 <span style="float: right;">本時(3時間目 / 4時間)</span>		
本時の 目 標	(1)日中戦争や太平洋戦争中の国民生活、国民の意識、経済力などについて理解するとともに、資料や講師の体験談を聞くことによって、興味・関心を高める。また、聞き取り調査など多様な歴史学習の方法を身につける。【関心・意欲・態度】 (2)戦争が国民生活にどのような影響を与えたのかを考えることによって、平和維持の大切さを再認識する。【思考・判断】 (3)資料を的確に読み取り、調べた内容をわかりやすくまとめて発表する。【技能・表現】 (4)国民生活の変化を戦争の経過と関連づけて理解する。【知識・理解】		
指導の内容・ねらい	学 習 活 動	指導上の留意点・観点別評価	
・戦争に向かう国民意識について考え理解する。  (10分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">             ・戦争中の国民意識はどのようなものであったのかを考える。           </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>資料1から人口増殖を図る政策を読み取る。</li> <li>資料2から兵役拒否と国内の雰囲気を読み取る。</li> <li>資料3の出征直前の兵士と家族の様子から、それぞれの心情を考える。</li> </ul> ＊戦争に向かう国民の意識の高まりを読み取る。	資料1～3から戦争に向かう国民の意識に気付かせ、まとめさせる。	
・戦時における日本の経済力と戦争の推移について考える。  (15分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">             ・戦争を支える日本の経済力について考える。           </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>資料4・5から石油輸入国の内訳と輸入量の推移を理解し、石油の確保が戦争継続のために不可欠であることを読み取る。</li> <li>資料6・7から飛行機の生産量や船舶保有の推移を理解し、戦争継続能力の著しい低下を読み取る。</li> </ul>	資料4～7をもとに日本が次第に劣勢となる理由をプリントにまとめさせる。机間指導で活動を確認。	
・戦時の国民生活の現実について理解を深める。  (25分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">             ・国内生活を中心に戦争の現実とはどのようなものであったのかを考える。           </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>資料8・9・11から、国民生活の切り詰めの様子や、空襲による物的・精神的・人的被害の大きさを読み取る。</li> <li>ビデオ映像により空襲などの現実を理解する。</li> </ul>	資料8・9・11から戦時の生活の厳しさを理解させる。 <評価方法> プリント記入、事後提出で確認。【思】	
・講師から体験談を聞き理解を深め、疑問点は積極的に追究する。  (40分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">             講師の証言を聞くとともに、疑問点を質問して理解を深める。           </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>実際の体験談を聞く。関心の深い点について積極的に質問し、追究する。</li> <li>講師からは食糧事情、空襲の様子、日常生活の様子、国民の意識などについてお話しいただく。</li> </ul>	関心をもった部分について、的確に質問させるとともに、より深く追究させる。 <評価方法> 生徒に質問をさせる。行動観察。【関】	
・自分の意見をわかりやすくまとめて発表する。  (45分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">             戦争に対する見方を授業を受ける前と対比しながらまとめ、発表する。           </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>授業を通して新しく考えたり、知ったことをまとめ、発表する。</li> </ul>	<評価方法> プリント記入、提出させ、事後確認。【知】  自分の考えをまとめさせる。	
・終戦後の日本の改革のために必要な視点を考える。  (50分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">             ・終戦後の日本がどのような国家を作らねばならないのかを考える。           </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>資料10の「弟の死」や、本時の学習内容から戦争の問題点を把握し、戦後の日本の再建のために必要な視点について考える。</li> </ul>	<評価方法> 意見発表【思】 終戦後の日本の改革の方向を本時の授業から予想させる。 <評価方法>【思】 意見発表	

< 資料編 >

資料 1

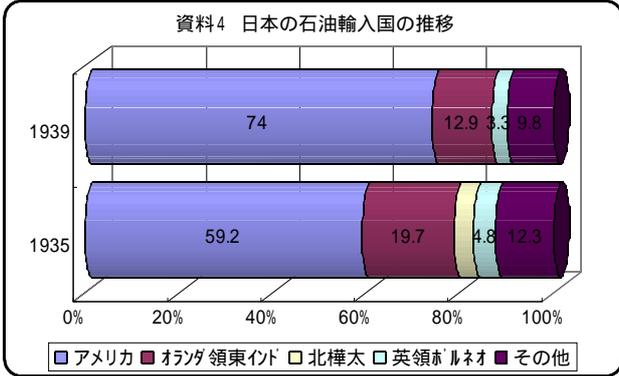
1941年の「人口政策要綱」では、初婚年齢が25歳、女子が21歳とし、1人平均5人の子を設けるようにした。これを受けて、25歳以上の男子と23歳以上の女子未婚者の一掃を女性たちが決めた都市もあった。

資料 2

俳優の三国連太郎氏は戦争の召集令状を受けましたが逃亡したそうです。しかし、孤独に耐え切れず、母に手紙を出したところ、その直後に発見され、つかまったのだそうです。密告したのは母だったのです。

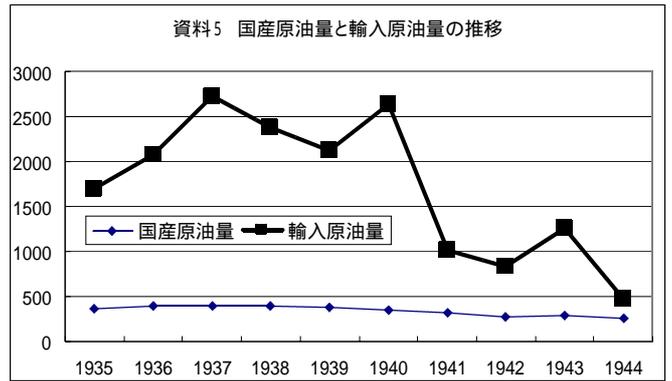
(「国防婦人会」などから作成)

資料 4



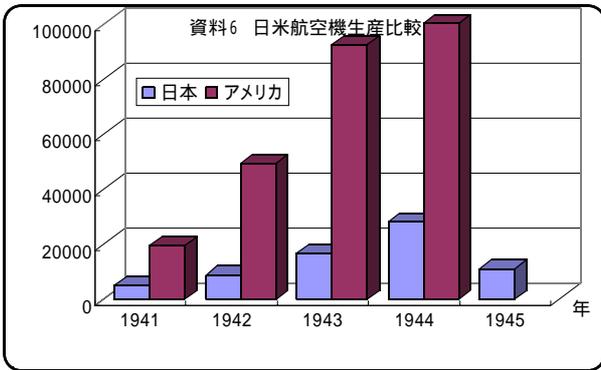
(東洋経済新報社編 「昭和産業史第1巻」から作成)

資料 5



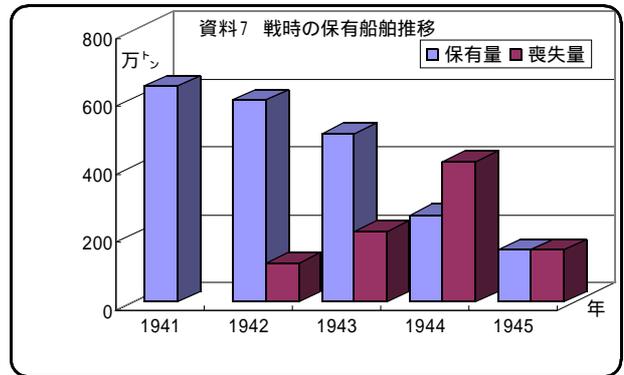
(東洋経済新報社編 「昭和産業史第1巻」から作成)

資料 6



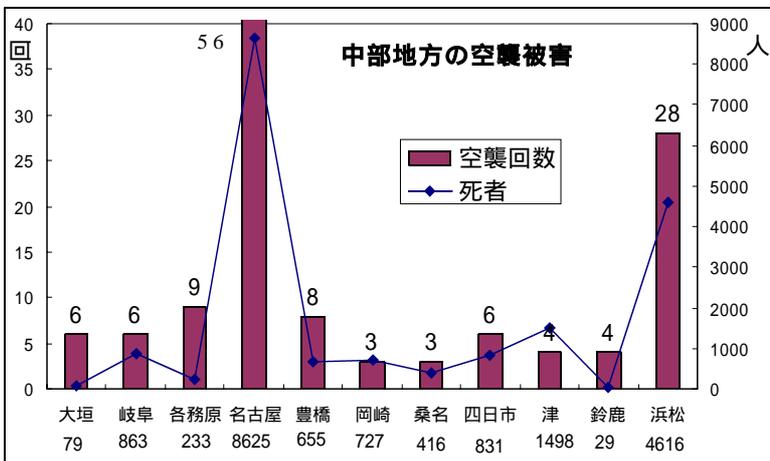
(遠山茂樹他著「新版昭和史」から作成)

資料 7



(安藤良雄著「現代日本経済史入門」から作成)

資料 11



(朝日百科「日本の歴史」第122巻12ページなどから作成)

資料 3、8、9、10 の写真は著作権の関係で掲載していない。

## 1 資料 1

戦争の拡大とともに、戦争を担う力を確保するための人口増加策が真剣に考えられた。また、女性は民族の母としての自覚のもと、早く結婚し、将来の日本を担う子女を育成する大任を負うものとされていた。1941年の「人口政策要綱」は大東亜共栄圏の発展を進めるための人口増殖を掲げている。その具体策として、結婚の奨励、出産の奨励、教育の強化をあげている。とりわけ、結婚は出産の前提条件として奨励しなければならないとされた。こうして、1942年ころ「欲しがりません、勝つまでは」とともに大流行した標語が「生めよ殖やせよ」であった。1942年2月には大日本婦人会が発足し、2000万人もの女性が組織された。町内会や部落会を単位として班が構成され、軍部や官庁の監督のもとに班を単位とした様々な戦争協力の活動にあたった。

## 2 資料 2

戦争の泥沼化と長期化のなかで政府は1937年に国民精神総動員運動を始め、また1938年に国家総動員法を発令し、戦争支持の体制が作り上げられた。部落会や隣組など国民生活の末端まで戦争協力のために組織される中、召集を忌避することは本人のみならず家族全員が日常生活を送ることができなくなることを意味した。

## 3 資料 3

出征兵士の写真から、登場人物それぞれの思いを考えさせることによって、当時の国家体制や国民意識を考えさせる。戦争に行きたくない、行かせたくないという思いの反面、出征拒否が非国民扱いを受けることなど、人々の内面の葛藤状況をより具体的に考えさせることで、戦時中の様子をより現実的に捉えさせたい。

## 4 資料 4～7

日本の国産原油は製品需要の1割強に過ぎず、圧倒的に輸入に依存していた。輸入先は仮想敵国であるアメリカをはじめ蘭領東インドや英領ボルネオであり、日中戦争はこれらの国や地域に依存して遂行されていた。特にアメリカに依存する割合が高く、しかも1939年にはその依存度が一層高まっている。日米関係の悪化とともに政府はアメリカからの石油供給の困難化を予想して、石油の備蓄に励んだが、開戦時の段階でも約2年分の量しか確保できていなかった。日本が支配した中国からは原油の産出が見られず、開戦後において支配に成功した南方の資源地帯からの輸入は、戦況の悪化とともに海上輸送路の維持が困難となったことにより、1943年をピークに減少していく。生産能力においても、日本は1940年の段階で工業生産能力をフル稼働させていたが、それでもアメリカの10分の1ないしそれ以下の、イギリスの半分ないし4分の1の生産量に過ぎなかった。船舶保有量、航空機生産能力からは日米間の工業生産能力の格差と、戦争の経過とともにそれが大きくなることが読み取れる。太平洋戦争への決断がいかに自国の経済力を無視したものであるかがわかる。

## 5 資料 8～11

資料8では国民生活の切り詰めの状況を、資料9では男子の動員による働き手の不足を、資料10では戦争による家族生活の崩壊を、資料11では身近な地域の空襲による被害の実態を取り上げ、戦時における国民生活が極度の耐乏と崩壊の危機に瀕していたことを読み取らせたい。

## 6 講師

講師からの経験談の聞き取りは、戦争をより身近に考えさせるために実施する。特に生徒が関心を寄せている部分については質問をさせながら、追究させる。戦争経験者の高齢化により体験の語り継ぎが年々難しくなることが予想される。適切な人材を探したり、発言内容の公平さや客観性については事前に打ち合わせをする。今回は生徒の家族にアンケートを行い人選した。

## 7 ビデオ視聴

NHKの「映像の世紀」の1コマで激しい空襲の様子を提示する。本校の当時の様子も写真で紹介する。

## 8 資料提示

資料提示にあたってはプレゼンテーションを用いる。

## &lt;単元の全体指導計画&gt;

## 第10章 近代日本とアジア

## 5 第二次世界大戦

- ・ 1時間目 「日中戦争の開始」
- ・ 2時間目 「第二次世界大戦と太平洋戦争」
- ・ 3時間目 「戦争と国民生活」(本時)
- ・ 4時間目 「戦局の展開と敗戦」

### 「課題追究型学習の成果と課題」

2年間にわたり新学習指導要領のねらいに沿った授業改善に取り組んできた。地歴・公民科の授業はどうしても教師による講義形式になりがちで、生徒の興味・関心・意欲を高める上で限界があると言わざるを得ない。従って、今回の研究では生徒各自の関心・意欲を高め、主体的に追究がなされるような授業を構築することをテーマに改善を試みた。

そこでまず生徒に疑問や課題意識を持たせ、自らの調べ活動によって解決していく授業構造を基盤とした。自己の疑問や課題意識がより明確化されるからであり、生徒の課題追究に向かう姿勢を高める上で有効であった。

また、調べた内容はレポートにまとめさせるとともに、個人やグループを単位に発表させることとした。表現力や創意・工夫の意識を高めるためである。発表の方法は限定しなかったが、将来的にはプレゼンやWEBページ作成に到達したい。活動の単位はグループと個人をそれぞれ展開してみたが、グループ形式の場合、一連の活動が一部の生徒任せになってしまう場合もあった。従って、扱う内容や生徒の関心・能力等によって活動単位を変える必要がある。このことは活動の進めかたについてもいえることで、何をどうやって調べるかといった調べ方の学習との両立をいかに図るかなかなか難しいところではあるが、関心が低く、基礎知識があまり身につけていない生徒に対しては比較的興味を引き易い題材から入ること、また、調べる項目や調べる資料なども予め準備する必要がある。授業形態についても様々な発想が必要である。おりから「開かれた学校作り」が話題に上っている時期でもあり、外部講師や各種史跡・資料館などの活用も今後大いに検討していきたい。

授業実践を終えて一番感じたことは、私自身が生徒個々の関心や適性・能力等をいかに掴んでいなかったかという反省である。日頃黙々と授業をうけている生徒が実に生き生きと課題に取り組む。一斉授業では見えなかった生徒の個々のよさや個性がつかめ、故に、それぞれに応じた個別的なアドバイスが可能で、能力・適正等の伸長にも大変有効であった。実際の生徒の自己評価からも関心・意欲が高まったとする生徒の割合が圧倒的に多く、ねらいの一部は達成できたと感じている。

ただ、課題も多く積み残された。例えば、評価に関しては、それぞれの単元の到達目標の明確化や、評価の方法の改善である。生徒の活動を的確に評価しないと授業の成果を高めることは難しいからである。また、いくつかのテーマを設定して選択的に取り組ませる場合、自分の取り組んだテーマについてはよく理解できても、他のテーマについての理解が深まらないという問題もある。関心・意欲は高まったが、調べた内容を深く吟味したり、他の関連する事項と結びつけて考えたりする思考・判断力はあまり高まったとはいえない面もあった。従って、個々の生徒を注意深く観察したり、より適切な支援を行うために、複数教員（内容によっては複数教科にまたがる）による展開も視野に入れる必要がある。

今回の授業研究では数時間をかけて展開したが、授業時数が減少する中で知識理解度の向上との両立をすすめるうえでは、これだけの時間をかけることはなかなか困難である。数時間単位の取組でなくとも、1時間の授業の展開を工夫することによって同じ効果が期待できる方法もある。今回の反省としてそのような授業展開例をより多く開拓することも重要であると考えている。

最後に、やはり実践する上でものをいうのは教師自身の日頃からの教材研究である。授業構築にあたってそのモチーフや発想がなかなか得られない。私自身今回の実践の中でそれを痛切に思い知らされ、最大の反省となった。今後もこの教訓を糧にして生徒が生き生きと意欲的に取り組む授業を1時間でも多く実践していこうと思っている。